

小西甚一編訳「世阿弥、能楽論集 - 初心忘るべからず - 」たちばな出版 2004年8月1日刊を読む

初心忘るべからず

1. さて、わたくしどもの芸に、あらゆる功德をひとまとめにした金言がある。それは、
「初心忘るべからず。」
というのである。これには、三箇条の口伝がある。
「批判規準となる初心を忘れてはならぬ。」(是非の初心忘るべからず)
「自分のそれぞれの時期における初心を忘れてはならぬ。」(時々^ひの初心忘るべからず)
「老後の初心を忘れてはならぬ。」(老後の初心忘るべからず)
この三句は、よくよく口伝を受けるべきものである。
2. 一、「批判規準となる初心を忘れてはならぬ」(是非の初心忘るべからず)というのは、青少年期の初心を忘れず身につけていれば、老後になって、いろんな利益があることをさす。「前の非^ひを知るのは、後の是^ぜを得るゆえんだ」という語があり、また「前車の覆えるのは、後車の戒めだ」ともいわれる。初心時代の未熟さを忘れるのは、初心以後の芸をも忘れたことになるではないか。
3. 一、「自分のそれぞれの時期における初心を忘れてはならぬ」(時々^ひの初心を忘るべからず)というのは、初心のころから壮年の時代、さらに老年期へと修行してゆく間に、各時期の年齢にふさわしい行きかたの曲を習得してきたのは、それぞれの時期における初心というべきものである。ところで、もし、各時期に習得した芸を、その場かぎり演じっぱなしにして、忘れてしまうというようなことをしていると、現在の年齢にあてはまる芸のほかは、何も身につけていないということになる。これに反して、以前に習得した芸のひとつひとつを忘れないで、すっかり現在の芸に包括すれば、彼の演能は、いわゆる十体にわたり、能数の尽きることはぜったい無い。過去のそれぞれの時期に演じた芸は、その時期ごとの初心なのである。それを、現在の芸のうちにそっくり具備するのは、すなわち「各時期における初心を忘れない」ということになるではないか。これができてこそ、あらゆる芸を兼備した役者といえよう。だから、各時期の初心を、けっして忘れてはならないのである。
4. 一、「老後の初心を忘れてはならぬ」とは、人の命には限りがあるけれど、能には終るところがない。各時期に相応した能を、ひとつひとつ習得してゆき、老後になってはその年齢に似つかわしい芸をきわめるといことが、「老後の初心」なのである。老後の初心であるから、老年期以前の能を老年期以降の心とするわけである。「50歳以後は、せぬ以外には方法がない」と言ってある。ほかに方法はないといわれるほど大事な芸を、老後になって初めてやるのは、これこそ「初心」でなくて何であろう。
5. 以上に述べたような次第で、生涯を通じて常に初心ということを念頭においてゆけば、芸は向上

する一方で、その最上の位を「しおさめ」とするわけであるから、能が退歩することはない。だから、「芸の底を見せないで生涯を送る」ということ、わたくしどもの芸道の奥義とし、子孫を導く秘伝とするのである。この心を譲りわたすのを、初心をいまでも伝えてゆく心得とするのである。もし初心を忘れることがあれば、自分の初心は子孫に伝わらない。あくまで初心を忘れず、幾代の後までも伝えるようにしなければならない。

[コメント]

「初心忘るべからず」には3つあり、その具体的内容が丁寧に語られている。日本人とは何か、日本人の独自性とは何か、日本文化とは何かを考えると、時に、「古典」を身につけることの大切さが語られることが多い。世阿弥の能楽論は大切にすべき古典の一つ。小西先生の訳も素晴らしい。大いに親しみたい。

- 2010年6月24日 林 明夫記 -